

学位論文題名

ドイツ金融史研究

—ドイツ型金融システムとライヒスバンク—

学位論文内容の要旨

本論文の目的：

本論文は、兼営銀行制を中心とするドイツ型金融システムを対象として、兼営銀行制の原型が構築される第一次大戦前、国際金本位制段階における構造的特質を明らかにし、さらに兼営銀行制に規定されたドイツ型金融システムと、中央銀行・ライヒスバンクの政策展開との相互の関連と規定関係を検討し、「通貨制度の構造的危機」の背景・原因を追求することを目的とする。そのうえで、ドイツ大銀行の国際的な展開を追跡し、その諸契機と具体的形態・国際的信用制度のネットワークの果たした役割と意義について分析を試みることである。

本論文の要旨：

第Ⅰ編「ドイツにおける銀行・金融制度の形成と展開」では、ドイツ型銀行類型・兼営銀行制成立の契機と要因、その基本的性格と問題点を考察した。第1章「個人銀行業者の時代とその活動」では、株式組織の銀行制度発達の基盤をなす個人銀行業者の活動と役割を検討した。19世紀前半ドイツは、多数の関税障壁による経済的分裂と鑄貨の不統一の状態にあり、王立・国立銀行や地主金融組合など伝統的金融機関が支配していた。商業・交通の発達につれて、個人銀行業者が各地の貨幣取扱・公債発行など金融取引の担い手として活動を広げていった。それに対して、商工業との信用関係を中心に、産業の資金需要に積極的に対応したケルン地方などの銀行業者の活動の実態・業務内容を検討し、産業革命の金融的課題に対するドイツの現実から、近代的信用制度の形成と株式銀行設立の必然性を考察した。

第2章「株式信用銀行の生成過程」では、1850年代のドイツ最初の株式信用銀行成立にいたる過程を考察した。鉄道建設と産業革命が本格化し重工業部門をふくめて、経営規模拡張のための資金需要が増大した。このため一般産業や鉄道業における株式組織の会社設立の道が開かれるとともに、個人銀行業者の資金力の限界から、創業や株式引受発行を支援する、資本力ある株式組織の銀行設立が強く求められた。プロイセン政府は、投機の弊害や通貨・金融秩序の維持の理由からこれに抑制的であって、株式信用銀行は、産業界と政府との緊張関係のなかで設立されたこと、その業務内容は、会社の創業や証券発行を

媒介する役割を重視する「証券銀行」的性格を持っていたことを検証した。

第3章「ライン・ウエストファーレンの地方銀行の展開」は、成立初期の株式信用銀行の「証券銀行」的性格が次第に変化し、産業との恒常的な関係が強まり、交互計算取引などいわゆる正規の銀行業務の拡大が図られていった過程を分析した。産業地帯の中心、ライン・ウエストファーレン地域を活動の舞台とした地方銀行・「ベルク・マルク銀行」を対象に、地方産業との取引が緊密化し、銀行信用の規模の拡大、貸付の長期化をもたらしたこと、その流動化のため、銀行業務と証券業務の兼営化と金融市場の中心・ベルリン大銀行との連携化の方向が求められたことを明らかにした。

第4章『「ドイツ型銀行類型」とベルリン大銀行』では、ベルリン大銀行を対象に、「証券銀行」的性格からの脱皮、交互計算業務など正規の銀行業務の拡大と、それを基礎として証券業務を有機的に兼営する「ドイツ型銀行類型」の業態的特質が形成される背景を追求した。1870年代の創業ブーム崩壊後、創業及び産業証券の引受業務の抑制・後退、正規の銀行業務の拡大という変化が進展し、さらに7,80年代の全般的経済動向の中で、預金の増大と自己資本比率の低下や、交互計算業務を中心とした正規の銀行業務の拡大を前提とした証券発行業務の展開という、両者の有機的関連が形成されることとなった。産業の側での集中化は銀行集中運動の本格化を促すこととなった。

第5章「銀行集中運動の展開と兼営銀行制の確立」では、1890年代後半以降の銀行集中運動の本格的展開を規定した契機を検討し、とくに地方諸銀行の貸付が拡大し長期・固定化の傾向を強めたため、資金拡張と流動性維持が重要な課題となり、ベルリン金融市場・ベルリン大銀行との連携が追求されたこと、これに対して大銀行は、産業的な基盤の一層の拡張・強化のために、産業地帯で強固な活動基盤を築いてきた有力地方銀行との連携化の道を求めた。大銀行と地方銀行との「利益共同体」形成による銀行集中運動によって、ドイツ型銀行類型・兼営銀行制の最終的確立を検証した。兼営銀行制の問題点として、産業金融の展開の結果としての流動性悪化を指摘し、兼営銀行にとって、流動性確保の決定的重要性を明らかにした。

第6章「ベルリン金融市場」では兼営銀行制と金融市場の関連を取り上げた。ベルリンが金融市場の中心として確立する過程を明らかにした後、金融市場を構成する手形割引市場及び証券市場について歴史的・構造的解明を行った。とくに、金融市場のいずれの分野においても、兼営銀行・ベルリン大銀行の地位と影響力が著しく拡張したことを確認し、兼営銀行システムと金融市場の問題について、その銀行信用、産業に対する信用供与とかわらせて、ドイツの兼営銀行にとっての流動性問題の重要性を明確にし、銀行の流動性確保の場としての金融市場の意義を強調したが、証券市場と並んで手形割引市場の位置づけを重視すべきとの見地を強調した。

第II編「ライヒスバンクと金融市場」では、兼営銀行制を基軸とするドイツ型金融システムのもとでの、中央銀行・ライヒスバンクの地位と政策展開を追求した。第7章「通貨・貨幣改革の展開」では、ドイツの貨幣・銀行改革の基本的道筋を検討した。銀本位段階の鑄貨体系の統一化の試み、金本位制への移行、発券制度の発達、発券の自由をめぐる諸対抗や、プロイセン銀行を主軸とした発券銀行の創設、ライヒスバンクへの改組による発券

の集中と中央銀行の確立への道筋を確認した。

第8章「ライヒスバンクの成立」は、帝国創立後の金本位制を基礎とした通貨・発券制度改革の基本的な枠組みとライヒスバンクの成立過程を明らかにした後、ライヒスバンクの政策課題の基本内容と、その政策課題を果たすうえでの政策基盤とともに、金本位制の基礎を強化するために取り組みられた諸方策を検討した。発券におけるライヒスバンクの基本的政策態度としての「受動的割引政策」が、イギリスにおける経験のドイツ流の「受容」によって形成されたこと、さらに支払取引における現金節約をめざして、ライヒスバンクによって創設・育成された振替取引・決済機構の拡大とその意義について掘り下げた。この段階の通貨構造の分析を行ったうえで、銀行券流通の変動過程での問題点として無準備銀行券の変動の原因を検討した。

第9章「ライヒスバンク政策の展開と金融市場」では、ドイツ型金融システムとライヒスバンク政策をめぐる問題状況の検討を行った。「大不況期」のライヒスバンクが取り組んだ課題の考察の後、世紀末及び世紀初頭の好況末期にライヒスバンクが「通貨制度の構造的危機」に追い込まれたのは何故かを追求した。その原因として①金融市場におけるライヒスバンクの地位と政策の有効性の低下・弱体化、②銀行集中を通じた大銀行の地位の強化、金融市場での支配力拡大、兼営銀行としての銀行信用の拡張、流動性問題解決の場としての割引市場、証券市場への影響力拡大、民間・大銀行の流動性準備の不十分性と危機におけるライヒスバンクへの全面依存、③危機におけるライヒスバンクの政策態度、とくに兌換性を問われる逼迫期に、市中からの再割引請求を拒否することの困難性、「ドイツ型金融システム」の崩壊を回避するには請求に応じざるを得なかったことを指摘した。「ドイツ型金融システム」がライヒスバンク政策を制約・規定したことを明らかにした。

第Ⅲ編「ドイツの国際的信用制度の構造」は、兼営銀行の国際的展開をベルリン大銀行の国際化、国際業務について考察し、「ドイツ型金融システム」の国際的連関の視角からの再把握を試みた。まず、第10章「ドイツにおける国際的信用制度」では、ドイツ大銀行の海外活動の骨格を考察し、国際的信用制度の輪郭を明らかにする。銀行業の国際化や海外活動の契機として、ドイツの銀行機構によるマルクでの貿易金融の媒介の要請と資本輸出の積極的展開について検討した。1870年代以降の銀行業国際化の諸段階を追跡し、ポンドに対抗するドイツ独自の国際的信用制度構築の過程を、海外銀行・国際銀行業の役割を含めて明らかにした。

第11章「ドイツの国際的信用制度の構造と動態」は前章を受けて、諸銀行・国際的信用制度の媒介機能の内容を具体的に分析した。ランプール(信用)業務、引受信用などによって遂行されたことを示し、海外諸市場での海外銀行・国際銀行による貿易金融・決済業務の検討を行った。さらに、取引・決済通貨の現実分析から、第一次大戦前の段階で、マルクでの取引・決済の拡張傾向が確認できること、取引・決済通貨の分裂が短資移動など国際金融取引に与えた影響を指摘した後、いわゆる「マルク決済メカニズム」の拡張の意義を、ポンド・スターリング決済メカニズムに対する対抗的側面と同時に、ポンドとロンドン金融市場に対する依存・従属的側面を併せ持つ存在であったことを明らかにした。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 濱 田 康 行

副 査 教 授 佐々木 隆 生

副 査 教 授 加 来 祥 男 (九州大学)

学 位 論 文 題 名

ドイツ金融史研究

—ドイツ型金融システムとライヒスバンク—

本論文は『ドイツ金融史研究』（副題：ドイツ金融システムとライヒスバンク）と題され、ミネルヴァ書房より 2001 年に公刊されている。全体で 500 頁を超える大著であり、3 編 11 章から構成されている。

<本論文の目的>

本論文は、兼営銀行制を中心とするドイツ型金融システムを対象として、兼営銀行制の原型が構築される第一次大戦前、国際金本位制段階における構造的特質を明らかにし、さらに兼営銀行制に規定されたドイツ型金融システムと、中央銀行・ライヒスバンクの政策展開との相互の関連と規定関係を検討し、「通貨制度の構造的危機」の背景・原因を追求することを目的とする。そのうえで、ドイツ大銀行の国際的な展開を追跡し、その具体的形態・国際的信用制度の果たした役割と意義について分析を試みる。

<本論文の要旨>

第 I 編「ドイツにおける銀行・金融制度の形成と展開」では、ドイツ型銀行類型・兼営銀行制成立の契機と要因、その基本的性格と問題点を考察した。第 1 章「個人銀行業者の時代とその活動」では、株式銀行制度発達の基盤をなす個人銀行業者の活動と役割を検討した。19 世紀前半ドイツは、多数の関税障壁による経済的分裂と通貨の不統一の状態にあり、王立・国立銀行や地主金融組合など伝統的金融機関が支配していた。商業・交通の発達につれて、個人銀行業者が各地の貨幣取扱・公債発行などの担い手として活動を拡げていった。産業の資金需要に積極的に対応したケルン地方などの銀行業者の活動の実態を検討し、近代的信用制度の形成と株式銀行設立の必然性を考察した。

第 2 章「株式信用銀行の生成過程」では、1850 年代のドイツ最初の株式信用銀行成立にいたる過程を考察した。鉄道建設と産業革命が本格化し資金需要が増大したため資本金力ある株式組織の銀行設立が強く求められた。プロイセン政府は金融秩序の維持の理由からこれに抑制的であった。株式信用銀行は、産業界と政府との緊張関係のなかで設立されたこと、その業務内容は、証券発行の媒介を重視する「証券銀行」的性格を持っていたことを検証した。

第 3 章「ライン・ウエストファーレンの地方銀行の展開」は、成立初期の株式信用銀行の「証券銀行」的性格が次第に変化し、産業界との恒常的な関係が強まり、交互計算取引などいわゆる正規の銀行業務の拡大が図られていった過程を分析した。地方銀行・「ベルク・マルク銀行」を対象に、地方産業界との取引が緊密化したため、銀行信用の規模の拡大、貸付の長期化がもたらされたこと、その流動化のため、銀行業務と証券業務の兼営化とベルリン大銀行との連携化の方向が求められたことが明らかになる。

第4章『ドイツ型銀行類型』とベルリン大銀行』では、ベルリン大銀行を対象に、「証券銀行」的性格からの脱皮、正規の銀行業務の拡大と、それを基礎として証券業務を有機的に兼営する「ドイツ型銀行類型」の業態的特質が形成される背景を追求した。1870年代の創業ブーム崩壊後、預金の増大と自己資本比率の低下や、正規の銀行業務の拡大を前提とした証券発行業務の展開が形成されることとなった。

第5章「銀行集中運動の展開と兼営銀行制の確立」では、1890年代後半以降の銀行集中運動の本格的展開を規定した要因を検討した。とくに地方諸銀行の資金拡張と流動性維持が重要な課題となり、ベルリン金融市場・ベルリン大銀行との連携が追求されたこと、これに対して大銀行は、産業地帯で強固な活動基盤を築いてきた有力地方銀行との連携化の道を求めた。銀行集中運動によって、ドイツ型銀行類型・兼営銀行制が最終的に確立される状況を検証した。

第6章「ベルリン金融市場」では兼営銀行制と金融市場の関連を取り上げた。ベルリンが金融市場の中心として確立する過程を明らかにした後、手形割引市場及び証券市場について歴史的・構造的解明を行った。とくに、金融市場のいずれの分野においても、兼営銀行・ベルリン大銀行の地位と影響力が著しく拡張したこと、ドイツの兼営銀行にとっての流動性問題の重要性を明確にした。さらに証券市場と並んで手形割引市場の位置づけを重視すべきとの見地を強調した。

第II編「ライヒスバンクと金融市場」では、兼営銀行制を基軸とするドイツ型金融システムのもとでの、中央銀行・ライヒスバンクの地位と政策展開を追求した。第7章「通貨・貨幣改革の展開」では、ドイツの貨幣・銀行改革の基本的道筋を検討した。銀本位段階の鑄貨体系の統一化の試み、金本位制への移行、発券制度の発達、ライヒスバンクへの改組による発券の集中と中央銀行の確立への道筋を確認した。

第8章「ライヒスバンクの成立」は、帝国創立後の金本位制を基礎とした通貨・発券制度改革の基本的な枠組みとライヒスバンクの成立過程を明らかにした後、ライヒスバンクの政策課題の基本内容を検討した。発券におけるライヒスバンクの「受動的割引政策」が、イギリスにおける経験のドイツ流の「受容」とみられること、さらにライヒスバンクによって創設された振替取引・決済機構の拡大とその意義について考察した。さらに銀行券流通の変動過程での問題点として無準備銀行券の変動の原因を検討した。

第9章「ライヒスバンク政策の展開と金融市場」では、一次資料『バンク・アンケート』等の利用により、ドイツ型金融システムとライヒスバンク政策をめぐる問題状況の検討を行った。「大不況期」のライヒスバンクが取り組んだ課題の考察の後、世紀末及び世紀初頭の好況末期にライヒスバンクが「通貨制度の構造的危機」に追い込まれたのは何故かを追求した。その原因として①金融市場におけるライヒスバンクの地位と政策の有効性の低下②銀行集中を通じた大銀行の地位の強化、民間・大銀行の流動性準備の不十分性と危機におけるライヒスバンクへの全面依存、③危機におけるライヒスバンクが、とくに逼迫期に、「ドイツ型金融システム」の崩壊を回避するには市中からの再割引請求に応じざるを得なかったことを指摘した。

第III編「ドイツの国際的信用制度の構造」は、「ドイツ型金融システム」の国際的連関の視角からの再把握を試みた。まず、第10章「ドイツにおける国際的信用制度」では、ドイツ大銀行の海外活動の骨格を考察し、ドイツの銀行機構によるマルクでの貿易金融の媒介の要請と資本輸出の積極的展開について検討した。

第11章「ドイツの国際的信用制度の構造と動態」は前章を受けて、諸銀行・国際的信用制度の媒介機能の内容を具体的に分析した。取引・決済通貨の現実分析から、第一次大戦前の段階で、マルクでの取引・決済の拡張傾向が確認できることなどを指摘した後、いわゆる「マルク決済メカニズム」の拡張の意義を、ポンド決済メカニズムに対する対抗的側面と同時に、ポンドとロンドン金融市場に対する依存・従属的側面を併せ持つ存在であったことを明らかにした。

<本論文の研究上の貢献>

- ① 兼営銀行制の成立過程および具体的業態について、個人銀行業にさかのぼって検討したこと、その際、各機関の営業報告書を利用したこと。

- ② 兼営銀行制の問題点を指摘し、その解決方式として従来から主張されている証券発行による流動化に加えて、手形割引市場での手形取引があったことを明らかにした。
- ③ 兼営大銀行が流動性確保のため証券市場、手形割引市場への影響力の拡大をめざしたことを明らかにした。
- ④ ライヒスバンクの政策展開をドイツ型金融システムとの関連において考察したこと。なぜ、「通貨制度の構造的危機」が生じたかについてひとつの説を呈示したこと。
- ⑤ 資料として『バンクアンケート』をはじめ全面的に利用した。これが、ドイツ特有の問題を意識しその原因究明をめざしたものであることを明らかにした。
- ⑥ プロイセン銀行からライヒスバンクへの移行過程というこれまでのドイツ金融史の空白を埋めたこと。
- ⑦ ドイツの銀行の海外進出の分析を通じて「マルク決済メカニズム」の拡張の意義を明らかにした。

本論文は、著者のこれまでの研究成果をまとめたものであるため、叙述に若干の重複が目立つが、それは形式的な問題で、上にあげた学会への貢献を損なうものではない。また、資料に内在した分析にやや不満が残る部分もあるが、それも本論文の功績を減ずるものとはいえない。以上の諸点から、本論文の学会への貢献は明らかである。審査委員全員の一致をもって、本論文を博士（経済学）の学位を授与するのに値するものと認める。